



慶應義塾中国文学会第九回大会要項

開催日 2024年7月13日(土)

対面開催

場所：慶應義塾大学日吉キャンパス 来往舎1階シンポジウムスペース



慶應義塾中国文学会第九回大会日程次第

13:30 開場 総合司会：松倉梨恵（慶應義塾大学文学部助教）

13:50～13:55 会長挨拶：関根 謙（慶應義塾中国文学会会長）

【研究発表】

14:00～14:30 「中国における民族言語学の研究について」

孟 達来（島根県立大学国際関係学部准教授）

司会：石村 広（中央大学文学部教授）

14:35～15:05 「金聖嘆本『水滸伝』の怒り描写と批評」

石川 就彦（慶應義塾大学非常勤講師）

司会：吉永 壮介（慶應義塾大学文学部教授）

15:10～15:40 「日本占領下上海における東亜聯盟運動——『中国与東亜』及び中華日報副刊「東聯週刊」を中心に」

山口 早苗（慶應義塾大学理工学部専任講師）

司会：代 珂（慶應義塾大学商学部准教授）

（休憩）

15:50～16:20 「袁紹とその臣下から見る毛宗崗本『三国志演義』の人物評価について」

鵜浦 恵（慶應義塾大学経済学部専任講師）

司会：吉永 壮介（慶應義塾大学文学部教授）

16:25～16:55 「日本人教師の中国語発音教育の実証的考察」

丁 雷（慶應義塾大学文学部准教授）

司会：浅野 雅樹（慶應義塾大学文学部教授）

【総会】

17:00～17:30

【懇親会】

18:00～ 於日吉キャンパス来往舎1階ファカルティールラウンジ
参加費 6000円（学生 3000円）

研究発表要旨

1 「中国における民族言語学の研究について」

孟 達来（島根県立大学国際関係学部准教授）

本発表では、中国領内における諸民族言語の研究について、系統論と接触論を中心に取り上げ、中国における民族言語学の研究動態について概観し、考察や検討を加える。

まず、中国領内の言語系統の研究に関して、研究蓄積の多い漢蔵語族やアルタイ語族の系統に関する研究を概観する。また、漢蔵語系の系統論や接触論をめぐる研究において導入された「関係詞」「深層対応」「言語影響論」「言語接触の無界有階説」などの概念や研究方法について概観し、考察を加える。

次に、中国領内の言語接触の研究に関して、主に、漢語と少数民族言語との接触関係に関する研究成果を概観する。また、歴史上の漢語と北方民族の言語との接触について、主に、元朝時代に成り立つ「蒙文直訳体」、明朝時代や清朝時代に成り立つモンゴル語漢字音訳文献を中心に考察する。

以上の考察や検討を通じて、系統論と接触論の視点から、中国における民族言語学の研究動向の把握を試みる。

キーワード：民族言語学、言語系統、言語接触、蒙文直訳体、漢字音訳

2 「金聖嘆本『水滸伝』の怒り描写と批評」

石川 就彦（慶應義塾大学非常勤講師）

明代白話小説の代表作である『水滸伝』は多数の版本が現存している。明末清初の金聖嘆が批評し、改変を施した七十回本（以下、金聖嘆本）には、金聖嘆の批評理論が大いに表出しており、同時代及び後世の白話小説批評に多大な影響を与えた。

金聖嘆は作中人物の人物像とテキストの関係に強い意識を抱いている。作中人物のキャラクターを表現し得るものとして感情表現が挙げられる。その人物がどのような事柄に対しどのような感情を抱くのか、そしてその感情をテキストにどのように表現するのかというのは、キャラクターイメージに影響を及ぼす。

感情表現とキャラクター形成の関係について、発表者はこれまで「金聖嘆本『水滸伝』の泣き描写と批評」（『慶應義塾中国文学会報』第4号、2020年3月）、「『水滸伝』の描く「笑い」」（『慶應義塾中国文学会報』第6号、2022年3月）で論じてきた。「怒り」描写を扱う本発表は、先の「泣き」「笑い」に続くものである。


本発表の主眼は、怒り描写が作中人物のイメージにどのような影響を与え、金聖嘆がそれらをいかに批評に取り込んだのかを論じることである。また「盗賊」としての梁山泊に批判的な金聖嘆の思想は、作中人物の口を借りて「怒り」として度々テキストに表出している。この点についても論じる予定である。

キーワード：水滸伝 金聖嘆 批評 キャラクター 感情表現 怒り

3 「日本占領下上海における東亜聯盟運動——『中国与東亜』及び中華日報副刊「東聯週刊」を中心に」

山口 早苗（慶應義塾大学理工学部専任講師）

東亜聯盟運動は石原莞爾を中心とする人々の日本の対アジア戦略として提起されたもので、戦時日本の対中政策に大きな影響を及ぼしたことで知られている。日中提携を謳い、「国防の共同・経済の一体化・政治の独立」を唱えた東亜聯盟論を、日本の占領地政権であった汪精衛政権は自らの立場を基礎づける理論として積極的に採用した。こうして中国国内では1940年に広州で中華東亜連盟協会が、1941年に南京で東亜連盟中国総会が、翌年上海分会が設立された。



先行研究によれば、広州での活動は「ある程度の進展を見た」が、南京・上海についてはすぐに失速状態となり、活動が有名無実化したとされる。ここで問題にしたいのは、そもそも汪政権は上海という文化、経済が発達し、日中人士の接触が最も多い都市で、同運動を推進する必要を唱えていたのに対して、この運動が空振りに終わったのはなぜか、という点である。これを明らかにするため、日本占領下上海において東亜聯盟運動がどのように展開され、どのように収束を迎えたか、その過程を分析する。

キーワード：日中戦争、東亜連盟、汪精衛政権、上海

4 「袁紹とその臣下から見る毛宗崗本『三国志演義』の人物評価について」

鶴浦 恵（慶應義塾大学経済学部専任講師）

清初に刊行された毛宗崗本『三国志演義』は、既存の『三国志演義』の版本に独自の改変を加え、また自身による多くの評を付している。その特徴については先行研究においても様々な指摘がなされているが、発表者は毛宗崗本における人物描写、及び毛宗崗の人物に関する評に着目し、文章の改変や、毛宗崗の人物評価がどのような基準でなされているのかについて、これまでいくつかの考察を行ってきた。その上で、本発表では、袁紹やその臣下に焦点を当て、その描写の特徴や彼らに対する毛宗崗の評価を詳らかにしたい。

袁紹は、物語の前半において曹操と敵対する勢力として存在感があるものの、毛宗崗の評には、曹操と比較して袁紹が劣っているとすることが繰り返し出てきており、一貫して評価されていない。ただし、袁紹の臣下の中で田豊や沮授は毛宗崗から高く評価されているが、審配や逢紀らは末子の袁尚を立てたことから厳しく批判されるなど、その評価には違いが見られる。

本発表はそうした人物評価を整理し、毛宗崗がどのように彼らを見ているのか、その傾向を探るものである。また李卓吾本『三国志演義』との比較を通して、文章の改変の有無やその背景についても考察を試みる。

キーワード：『三国志演義』、毛宗崗、袁紹

5 「日本人教師の中国語発音教育の実証的考察」

丁 雷（慶應義塾大学文学部准教授）

音声教授研究では、音声研究の成果をどのように実際の教育に役立てるのかという現実的な問題がある。しかしながら、この「転換」を実現するためには、教師が学生の音声習得メカニズムを十分に理解できるかどうかは鍵である。このために最も基本的なことは学生との円滑なコミュニケーションの場を確立することである。もちろん、中国人教師も日本人教師も、専門的な音声トレーニングをすでに受けていたら、教師と学生の間でコミュニケーションの場を築くことができるであろう。しかし、教師にどのようなトレーニングを受けさせるべきか？例えば、発音指導の場合、中・高級段階の指導はどのように設計されるべきか？音声専門家の発音指導はどのようなものなのか？日本人教師と中国人教師の発音指導法にはどのような違いがあるのか？これらの疑問は、現在までに十分に研究されていない領域である。

本発表では、教師、教材、および授業活動の三つの面から、日本人中国語教師の発音授業（15回分）を紹介する。主なポイントは、音声解説の理解しやすさ、発音教授法の特徴、さらにはその発音授業を慶應義塾大学文学部中国文学専攻に導入可能かどうかである。

キーワード：中国語教育、発音指導、音声教授法、中国語教師、日本人教師

